

12月の防除のポイント

令和5年11月29日
東京都病虫害防除所

主な作物の病虫害防除について、お知らせします。

<イチゴ>

○ハダニ類

12月以降のハダニ類は施設外からの侵入がほとんどないため、今後は施設内の個体数を減らすことが重要となります。効率的な防除の工夫として、図1のように発生場所に旗等の目印を立てる方法があります。利点は二つあります。一つ目は、発生場所が可視化できる点です。ハダニの発生は均一に起こることは少ないため、重点防除が必要な場所の把握が容易になります。二つ目は、防除効果が確認できる点です。散布後の調査でハダニの生息範囲が広がったり、旗付近での生き残りが多ければ、前回の対策が不十分であったことが確認できます。その結果、今後の薬剤や散布時期の変更などについての判断が容易になります。このような工夫も取り入れハダニ対策を行いましよう。



図1 ハダニ発生場所の目印

<促成長期どりトマト>

○タバココナジラミおよびトマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻病の原因となるタバココナジラミの防除が重要となります。外部からの侵入はほとんどなくなるため、施設内に生息する個体の防除が重要となります。11月に引き続き幼虫に対して効果の高い殺虫剤も併用

し、施設内の徹底防除を目指しましょう。本種は比較的高温を好むため、低温期になると発育が遅くなり、幼虫が長い間寄生することになります。冬季は葉かきを適度に行い、下葉を除去することで防除効果を高めることができます。

○トマトサビダニ

促成長期どりのトマトでは冬期間でもトマトサビダニの被害が問題になります。雌成虫の体長は約0.2mmと小さく、肉眼で識別するのは困難です（図2）。生息環境は乾燥状態を好み、被害は地際部に近い方から上方に広がり、茎は光沢をもった深緑色から褐色に変化します。さらに被害が進行すると、葉や茎が枯死し、一見すると病気のような症状となります（図3）。果実に寄生すると果実表面の褐変や細かい亀裂を生じ、著しく商品価値が低下します。防除対策としては殺ダニ剤やIGR系殺虫剤の散布が効果的です。防除指針を参考にし、適切な薬剤を選択しましょう。



図2 トマトサビダニ



図3 トマトサビダニの被害の様子

○灰色かび病

施設栽培において灰色かび病が発生し始める時期です。20℃前後の多湿条件下で被害が拡大しやすい病気です。施設内が過湿条件になると病原菌が蔓延する恐れがあるため、適度な換気を行うようにしましょう。また、茎葉が繁茂すると発生しやすくなるため、適正な肥培管理及び適度な葉かきを行うようにしましょう。

発生を認めたら発病部位を除去します。合わせて防除指針を参考に、予防も含め、薬剤散布を行います。その際、同一の殺菌剤を連用すると耐性菌が出現する恐れがあるため、分類の異なる薬剤のローテーション散布を心がけましょう。

<アブラナ科野菜>

○白さび病（図4、5）

本病はハクサイ、ダイコン、コマツナ等のアブラナ科野菜類に発生する病害で、葉裏に不規則にふくれた白色の粉状の塊を形成し、葉の黄化や奇形を引き起こします。また、ダイコンの白さび病菌は根部に黒色のリング状斑紋（わっか症）を引き起こします。

病原菌は比較的低温を好むため、晩秋から早春にかけて降雨が多いと発生しやすくなります。

ほ場を注意深く観察し、発生を確認した場合、被害葉を除去し、防除指針を参考に薬剤散布を行いましょう。



図4 コマツナの白さび病



図5 ダイコンのわっか症

○べと病

本病は例年11月～3月の低温時期に発生が確認されています。カブやダイコンでは地下部に黒変症状を引き起こすことがあり、注意が必要です。

作物が長時間濡れた状態になっていると急速に拡大し防除が難しくなるため、換気等を行い、作物体周囲の湿度をできるだけ低く保つよう心がけましょう。また、発生を確認した場合、発病葉は速やかに除去し、防除指針を参考に薬剤を散布しましょう。

上記以外の病害虫についてのご相談は、電話（042-525-8236）又はEメール（S0200303@section.metro.tokyo.jp）にてお問い合わせ下さい。